

様式 1

研究報告書（平成 26 年度）

提出者 川本 彩花

提出年月日 2015 年 3 月 27 日

**【本ユニットにおける研究テーマ】**

和文 アジアにおける文化的公共圏の変容：クラシック音楽教育システム「エル・システマ」を事例として

英文 The Transformation of Cultural Public Spheres in Asia:  
Case Study of a Music Education System “El Sistema”

**【研究のねらいと目的】**（600 字程度）

近年、文化行政の予算削減やそれに伴う市場化の圧力などを背景に、「芸術」の芸術的価値のみならず、広く社会的な役割や価値が問われるようになってきている。こうした現代社会における「芸術」のあり方の変容（＝芸術至上主義のゆらぎ）をよりよく理解するためには、単に現状を指摘・記述するにとどまらず、そもそも、なぜ／いかにして「芸術」という表象すなわち芸術至上主義が形成されたのかを、当該社会・時代との関係のなかで問いなおす作業が必要なのではないか。

このような問題意識のもと、これまで、芸術のなかでも音楽に焦点を当て、①「芸術崇拝の思想」（松宮 2008）ともいべき芸術至上主義はいかにして 19 世紀西欧社会に出現したのかについて、ベートーヴェンを事例に検証してきた。②また、芸術至上主義は現代日本においていかに受容されているのかについて、長野県松本市での調査をもとに検討した。

これらをふまえて本ユニットでは、現代社会における「芸術」のあり方の変容（＝芸術至上主義のゆらぎ）に焦点を当て、その具体例として、文化・芸術を活かした地域活性化や青少年育成に関するプロジェクトの調査研究を進める。とくに本研究では、南米ベネズエラで始まり、近年日本を含むアジアでも、震災復興やいじめ・犯罪対策に活用できるとして注目が高まっている音楽教育システム「エル・システマ」に焦点を当て、音楽のもつ「救済性」と「暴力性」という 2 面性・両義性について考察していきたい。

**【研究業績】** 学会報告・論文など

◆学会等報告

KAWAMOTO, Ayaka, “The Reception of “Art for Art” s Sake” in Japan: Case Study of a Classical Music Festival Audience”, *The 18th International Sociological Association World Congress of Sociology*, Pacifico Yokohama, Japan, July 2014.  
川本彩花、「マックス・ヴェーバーの音楽論」、2014 年度龍谷大学社会科学研究所共同研究会、龍谷大学、2015 年 2 月。

◆論文

川本彩花、「近代音楽における芸術至上主義の形成——ベートーヴェンを中心とした社会学的研究」、京都大学大学院人間・環境学研究科 2014 年度博士論文。

**【成果の概要】**（800字程度）

本年度の主要な成果として、博士論文（2014年9月博士号取得）の概要について述べる。

博士論文では、「芸術崇拜の思想」ともいうべき芸術至上主義はいかにして19世紀西欧社会に出現したのかについて、ドイツの音楽家ベートーヴェン（1770～1827）を事例に、当時進展しつつあった商品経済およびメディアの視点から検証した。その際、J. ハーバーマスの文化的合理化論を理論枠組みとして援用した。

まず、伝記と書簡を手がかりにベートーヴェンの生涯と言説を分析し、芸術至上主義が形成された具体的諸相を商品経済の視点から検討した。その結果明らかになったのは、「芸術」とは一見相反する商品経済の流れが、「芸術性」の発見にとって大きな役割を果たしたという、「芸術」と経済の相互補完的関係である。次に、当時の音楽雑誌を手がかりにベートーヴェン批評の内容を分析し、芸術至上主義が形成された具体的諸相をメディアの視点から検討した。その結果、本来的には音楽（家）と市民社会とのあいだをつなぐべきメディアが、かえって両者の隔たりをよびさましたという逆説的なダイナミズムが明らかになった。以上より、近代音楽における芸術至上主義の形成とは、商品経済の視点からもメディアの視点からも、逆説を伴う現象であったと総括した。

さらには、以上の分析・考察結果と、理論枠組みであるハーバーマスの文化的合理化論とをつき合わせつつ理論的考察を行ない、文化的合理化論に対する批判的再検討を行なった。そして、本論文で実証研究を行なった結果新たに見えてきた知見として、市場（商品経済）と批評（メディア）とがむしろ相互浸透した両者の戦略的な相互補完関係を指摘し、まさにこの点に、文化的合理化論を批判的に再検討することのできるひとつの契機があると結論づけた。

以上の成果は、今後さらに近年の「芸術至上主義のゆらぎ」ともいうべき現象に焦点を当て、その具体例として、「エル・システム」をはじめとする文化・芸術を活かした青少年育成や地域活性化に関するプロジェクトの調査研究を進めていく上で大きな基盤となる。

**【通信欄】**